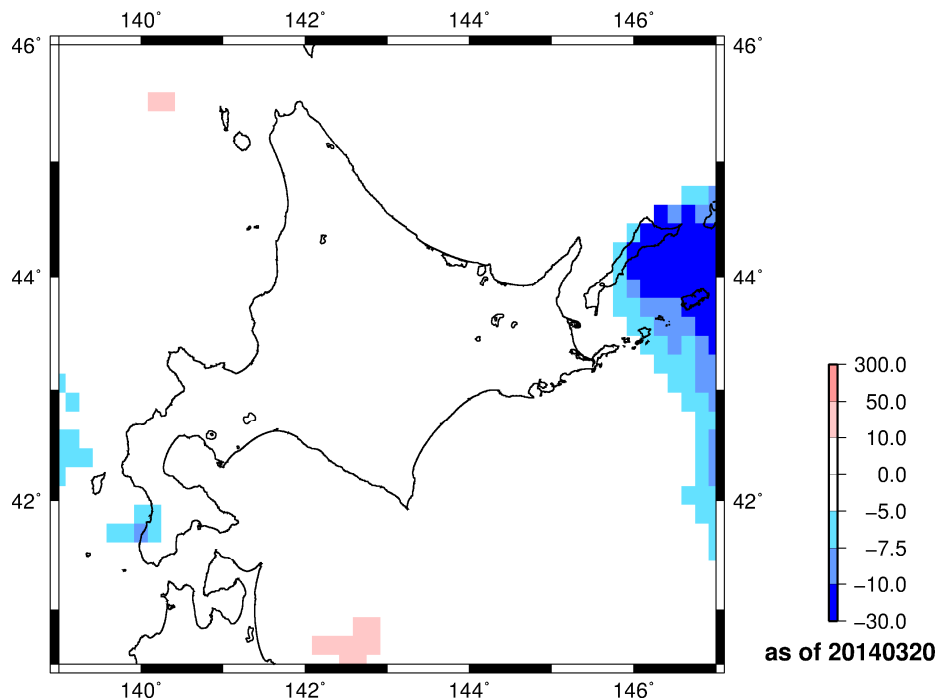
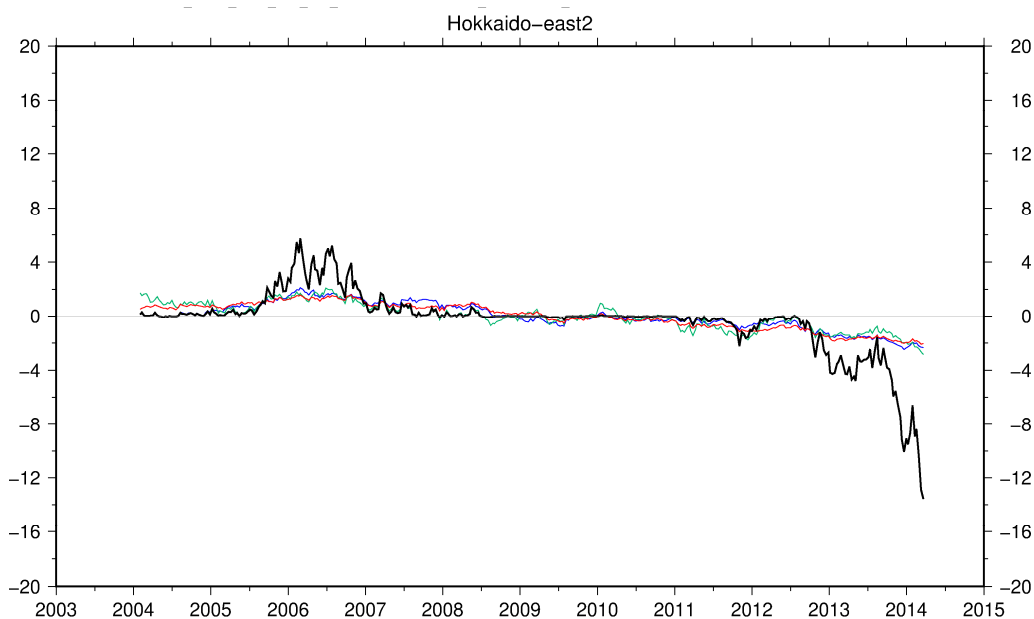


北海道東方沖の異常

前回のニュースレターで、「青森沖から北海道沖に異常あり」とお伝えしましたが、これは311以降の比較的短期間の地震活動のゆらぎです（2011年4月以降のデータを使用）。そこで、念のため北海道沖について2001年からのデータ（つまり10年以上のより長期間の地震データ）を使った解析を行ってみました。その結果、昨年中ごろから北海道東方沖で顕著な地震活動静穏化領域（図中の青色の領域）があらわれている事が判明しました（異常は現在進行形です）。



下のグラフは青い領域の中心付近の北緯44度、東経146.5度における過去10年間の時間変化です。まだ静穏化が進んでいる状態であり、すぐに大地震が発生するとは考えてはいません。今後推移を追跡していきたいと思えます。



## 〈地震豆知識〉

3月14日に発生した伊予灘の地震の後、気象庁は「この地震は南海トラフの巨大地震には影響しない」という主旨のコメントを発表しました。なぜこのような事が言えるのか、ここで気象庁の考え方を説明したいと思います。

皆様よくご存じのように、海水は月と太陽の引力を受けて、一日に2回干潮と満潮を繰り返します。これを“海洋潮汐”と呼びますが、月と太陽は海水だけでなく、地球本体にも影響を及ぼしています。これを“地球潮汐”と呼びます。

もちろん地球潮汐を我々が認識する事はありませんが、実は日本が位置する中緯度地域では一日に20-30cm高さ(=地球中心からの距離)が変わっているのです。下の図は国立天文台のホームページにある図ですが、固体地球自体がラグビーボールのように変形する事を示しています。

この地球潮汐はもちろん地殻にも影響(歪)を与えます。伊予灘の地震でも地下に断層が生じますが、その断層運動による歪が南海トラフの想定震源域に与える影響が地球潮汐で毎日変形されている量と比較して、無視できる時に気象庁は「南海トラフの巨大地震に影響はない」とのコメントを発表します。

つまり毎日規則的に月や太陽から受けている歪より地震による歪が無視できるほど小さいという事なのです。

